



毎月十五日発行 所大社 社会
像像 像像
宗宗
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1314
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式用品
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園二一三(千号)
本店 福岡市博多区東公園二一三(千号)
電話 福岡(094)651-1945
京都市下京区油小路六条北入(千60)
電話 京都(075)341-4100
電話 京都(075)341-3341

五月・浜宮祭齋行

五月晴れに恵まれて

「端午の節句」の五月五日、正に五月晴れの絶好の日の中、恒例の五月・浜宮祭と江口早月祭が齋行された。

先ず午前十時三十分、神湊の浜宮に於て養父宮司以下神職奉仕のもと浜宮祭を齋行、神湊地区の各区長を始め氏子総代が参列した。

浜宮祭に引き続き、祭場を釣川河口の五月宮に移し、五月祭を齋行。神職を囲み、祭場に江口区々長、役員、

えされた神饌には海川山野の味物に、赤飯、菖蒲酒、ちまき、ガメの葉饅頭等が加えられて、子供達の健やかな成長を祝う「端午の節句」を象徴している。

両宮の齋行が終了後、神那宗像の母なる川、静かに流れる釣川沿いにある当大社五月祭にて直会が催された。櫓の若葉が敷かれた折敷に盛られた赤飯、ガメ煮、ちまき、ガメの葉饅頭の御膳を、手作りの栗箸で

「お座」迄、御座船を仕立て、浜下り神事が行われ、また祭りの後には、五月浜にて宗像宮の社人・家人が武技、競馬を競い、盛大に祭典・神賑いを催していた。

この祭りは、中世「五月会」と称され、秋季大祭「放生会」と共に当大社の一大行事として盛大に執り行われていた。

当時は釣川の入江も奥深く入り込んでおり、第二宮、第一宮、第二宮、第三宮と織幟神札、許斐宮の五神輿が辺津宮御前浜(現在の当大社神宝館

延べ五三六名にのぼる先輩達を世に送り出している。

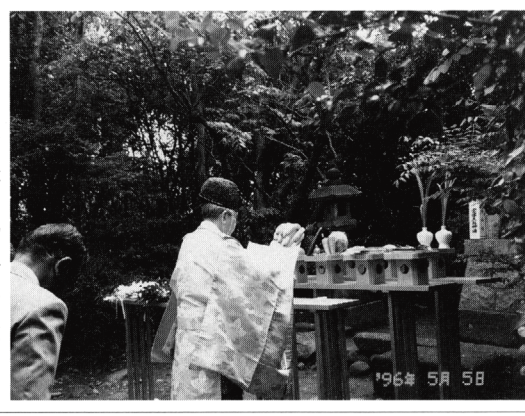
昭和天皇は、六十余年に亘る激動の昭和時代、常に国民と共に歩まれ、国の繁栄と国民の幸福を希望され

この祭典を終えると、神那宗像では、いよいよ田植えの準備にとりかかる。一面の水田には水が入り、その水面には早苗が影を浮かべ、樹木の緑も毎日色を変わり、今に受け継がれる。

この祭典を終えると、神那宗像では、いよいよ田植えの準備にとりかかる。一面の水田には水が入り、その水面には早苗が影を浮かべ、樹木の緑も毎日色を変わり、今に受け継がれる。

「評」三句までは、俳句にも通じる内容であり措辞であるが、不順な今年の天候のなか草木は確実に季節をきざんでいる。それを山桜に焦点を合せ、おおらかに詠い得ている。

自由ヶ丘 津江富美子
それぞれが顔向き合ひて乗りてある満員電車にわれも黙せり



「端午の節句」の五月五日、正に五月晴れの絶好の日の中、恒例の五月・浜宮祭と江口早月祭が齋行された。

先ず午前十時三十分、神湊の浜宮に於て養父宮司以下神職奉仕のもと浜宮祭を齋行、神湊地区の各区長を始め氏子総代が参列した。

浜宮祭に引き続き、祭場を釣川河口の五月宮に移し、五月祭を齋行。神職を囲み、祭場に江口区々長、役員、

「お座」迄、御座船を仕立て、浜下り神事が行われ、また祭りの後には、五月浜にて宗像宮の社人・家人が武技、競馬を競い、盛大に祭典・神賑いを催していた。

この祭りは、中世「五月会」と称され、秋季大祭「放生会」と共に当大社の一大行事として盛大に執り行われていた。

当時は釣川の入江も奥深く入り込んでおり、第二宮、第一宮、第二宮、第三宮と織幟神札、許斐宮の五神輿が辺津宮御前浜(現在の当大社神宝館

延べ五三六名にのぼる先輩達を世に送り出している。

昭和天皇は、六十余年に亘る激動の昭和時代、常に国民と共に歩まれ、国の繁栄と国民の幸福を希望され

この祭典を終えると、神那宗像では、いよいよ田植えの準備にとりかかる。一面の水田には水が入り、その水面には早苗が影を浮かべ、樹木の緑も毎日色を変わり、今に受け継がれる。

この祭典を終えると、神那宗像では、いよいよ田植えの準備にとりかかる。一面の水田には水が入り、その水面には早苗が影を浮かべ、樹木の緑も毎日色を変わり、今に受け継がれる。

「評」三句までは、俳句にも通じる内容であり措辞であるが、不順な今年の天候のなか草木は確実に季節をきざんでいる。それを山桜に焦点を合せ、おおらかに詠い得ている。

自由ヶ丘 津江富美子
それぞれが顔向き合ひて乗りてある満員電車にわれも黙せり

玄海少年自然の家所長外が参列する中、祭典は滞り無く終了した。

当日の両宮の神前にお供

戴きながら、菖蒲酒を酌み交した。寮の縁側から望むと、釣川対岸の家並の軒高く、青空に悠然と泳ぐ鯉の

「お座」迄、御座船を仕立て、浜下り神事が行われ、また祭りの後には、五月浜にて宗像宮の社人・家人が武技、競馬を競い、盛大に祭典・神賑いを催していた。

この祭りは、中世「五月会」と称され、秋季大祭「放生会」と共に当大社の一大行事として盛大に執り行われていた。

当時は釣川の入江も奥深く入り込んでおり、第二宮、第一宮、第二宮、第三宮と織幟神札、許斐宮の五神輿が辺津宮御前浜(現在の当大社神宝館

延べ五三六名にのぼる先輩達を世に送り出している。

昭和天皇は、六十余年に亘る激動の昭和時代、常に国民と共に歩まれ、国の繁栄と国民の幸福を希望され

この祭典を終えると、神那宗像では、いよいよ田植えの準備にとりかかる。一面の水田には水が入り、その水面には早苗が影を浮かべ、樹木の緑も毎日色を変わり、今に受け継がれる。

この祭典を終えると、神那宗像では、いよいよ田植えの準備にとりかかる。一面の水田には水が入り、その水面には早苗が影を浮かべ、樹木の緑も毎日色を変わり、今に受け継がれる。

「評」三句までは、俳句にも通じる内容であり措辞であるが、不順な今年の天候のなか草木は確実に季節をきざんでいる。それを山桜に焦点を合せ、おおらかに詠い得ている。

自由ヶ丘 津江富美子
それぞれが顔向き合ひて乗りてある満員電車にわれも黙せり

昭和祭齋行

第三十七期生 大社奨学金奉告祭

昭和天皇の御遺徳を偲びその御聖業を讃える昭和祭が、去る四月二十九日のみどりの日に厳肅に齋行された。

午前十一時、養父宮司以下神職、参列者が齋館前に列立、一鼓の後参進、祝告にて修祓の儀を行い、拝殿所定の座に着座、祭典が執り行われた。

祭典には氏子崇敬者をはじめとして、当大社奨学金受給生等が参列、宮司より昭和天皇の御聖徳を讃え、

皇室の弥栄と国家国民の安泰を祈念する祝詞が奏上された。次に昭和天皇の御製であり、皇紀二千六百年奉祝の際に制定された浦安舞が、当大社巫女により舞われた。当日は、連休中でもあり参拝者も多く、優雅な舞姿に参拝者もしばし足を止めていた。

また今上陛下の御成婚を記念して開始された宗像大社奨学金受給生奉告祭が儀式で行われた。今年で第三十七回を迎え、受給生も

この偉大なる昭和天皇の御聖徳を偲び、さらには今上陛下の御聖寿の万歳を祈念して、祭典は滞り無く終了した。

「評」三句までは、俳句にも通じる内容であり措辞であるが、不順な今年の天候のなか草木は確実に季節をきざんでいる。それを山桜に焦点を合せ、おおらかに詠い得ている。

自由ヶ丘 津江富美子
それぞれが顔向き合ひて乗りてある満員電車にわれも黙せり

「評」三句までは、俳句にも通じる内容であり措辞であるが、不順な今年の天候のなか草木は確実に季節をきざんでいる。それを山桜に焦点を合せ、おおらかに詠い得ている。

自由ヶ丘 津江富美子
それぞれが顔向き合ひて乗りてある満員電車にわれも黙せり



この偉大なる昭和天皇の御聖徳を偲び、さらには今上陛下の御聖寿の万歳を祈念して、祭典は滞り無く終了した。

「評」三句までは、俳句にも通じる内容であり措辞であるが、不順な今年の天候のなか草木は確実に季節をきざんでいる。それを山桜に焦点を合せ、おおらかに詠い得ている。

自由ヶ丘 津江富美子
それぞれが顔向き合ひて乗りてある満員電車にわれも黙せり

「評」三句までは、俳句にも通じる内容であり措辞であるが、不順な今年の天候のなか草木は確実に季節をきざんでいる。それを山桜に焦点を合せ、おおらかに詠い得ている。

自由ヶ丘 津江富美子
それぞれが顔向き合ひて乗りてある満員電車にわれも黙せり

又江口区の氏神様、辻八幡宮の境内に祀られる早月宮の神前におられる早月宮の参列のもと正午より祭典が行われ、終了後拝殿にて



日本海に浮かぶ小島「竹島」の領土問題めぐって、日韓関係は平穏とはいえない。

面積わずか〇・三平方キロ、江戸時代山陰の漁師はこの小島を「松島」と呼んでいた。明治三十八年、時の政府はこの松島を日本固有の領土であると宣言し「竹島」と名付けたが、韓国側も独立後に領土権を主張。日本政府はこの三月、国連海洋法条約の批准に伴う排他的経済水域の設定問題で「竹島」周辺海域に、事実上の共同管理水域である第二水域設定を韓国側に提案する方針を固めた。

第三水域とは、日韓双方が「竹島」を基点に線引きを行った際に重複する部分で、「竹島」周辺海域は漁業資源が乏しいという、その他の海域はズワイガニ、ヒラメ、イカ等の格好の漁業となっており、日韓双方の漁業関係者間でトラブルが多発している。

韓国では、四月の総選挙で、この「竹島」問題が論争となり、領有権問題で対日強硬論者の金泳三大統領に対して、金大中氏は「日本は三千年前に国交正常化をした時から独自(韓国)名を日本の領土である」と主張しており、此の度もその主張を繰り返した。それなのに韓国政府は日本が独自島を占領したりするのではないかと発作的に騒ぎを起こしている」と批判している。

河東 薄 かわる
葉校となりて疼痛癒えし手に夫は陶土を捏ね初めたり
「評」感情をまじえず詠っているが、再び土を捏ね始めた夫とそれを見守る妻の喜びが言葉に何れも余情ある作品。疼痛が例えはリウマチなどと具体的に二層良いのだが。

朝野 藤井 浩子
稜線の向かふは何処や病室に眺めてをれば空暗みきつ
「評」誤字と表現を少々直したが、見知らぬ土地での病室に居ることの不安が二句を受けての「空暗みきつ」にうまく表された。

津屋崎 佐々木和彦
雨後の日が差しはじめたる菜の花は花粉がそこらあたりに匂ふ

原町 八波 五月
真向ひの許斐の峯は風荒ぶ雲間に春の雷光り

城南ヶ丘 中間日出子
開店にやつれし妹はおおいにという声きけば顔のかがやく

田野 森 つるの
水の面に小さき波紋画きつつ雨の早期田暮るるしづかに

曲 天野 玲子
昨日までありたる樹々が切られゆき緑の丘のまた一つ消ゆ

武丸 中村さつき
幾世代経し墓石か風化せる我が祖の生地に彼岸桜咲く

自由ヶ丘 調 貞子
中空に月煌々と輝きて庭の残雪寒々と白し

ひかりヶ丘 藤原みさを癒ゆることむつかしと言ふ妹を見舞ふ言葉を選びえらびて

日の里 大和美由紀
陽溜りの手にひそかに童咲き清しき青に心足らへり

土穴 瀧口 敦子
白鷺の低く飛ぶ影水面に写るも化し霜の濃き朝

自由ヶ丘 細川 絹子
空洞を幹に持ちたる梅古木枝にびつとりと花をつけをり

名屋屋 小田 留子
母親の口調に犬を叱りをり綱を持つ子は朝の散歩に

池田 小田 イセ
何鳥の銜へ来たるや万向の実木の下に紅々と照る

田野 森 甲子
菜の花は五町のたんぼを黄に染めて道行く人を楽しませくるる

赤間ヶ丘 中武 アサ
堰とめて小川の洗場に菜を洗ふ人に声かく故郷に來て

吉留 高山 信子
昔ながらのお大姉様のおこもりに娘らゆく見ればうれしかりけり

大島 河野 英子
春雷の一鳴り響く雲追へば娘の住む町の空は明るし

吉留 白木うめ
夕やけ茜の空を一群の渡り鴉がささはさとはとく

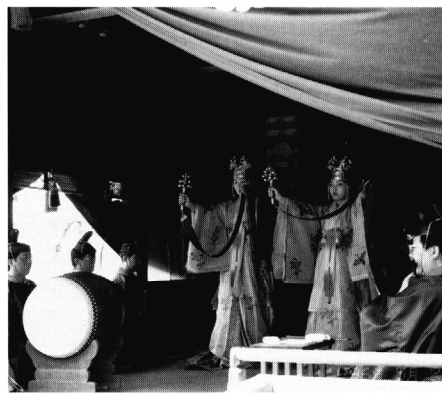
宗像大社歌会詠草

大野 展 男 選
毎月末日、切

沖・中両宮春季大祭

遙か沖合い沖津宮へ敬虔なる祈り

大島の山並の新緑が目につく。休漁し今年の豊漁・操業安
 鮮かな、五月一・二日の間、
 沖津宮・中津宮両宮の春季
 大祭が斎行された。
 中津宮大祭は、例年旧曆



三月十四・十五日に齋行
 されるので、本年はゴールデン
 デンウィークの中の日にあつた
 五月一・二日となった。
 大祭日は大島の漁民は
 御嶽宮、沖津宮遥拝所の清
 掃を行った。
 翌二日には、早朝より奉
 賛会、婦人部総出で、繩の
 張り替えや職立てなどの大
 祭りの準備を行った。午前中
 は全て整い、後は大祭を待
 つばかりとなった。
 午後三時、中津宮境内に
 於て地主祭を齋行。大祭が
 善く行われる事を祈った。
 午後五時、沖津宮遥拝所
 と中津宮同時に宵宮祭が齋
 行された。
 大祭日の二日、絶好の
 祭典日和に恵まれ、先ず午
 前八時三十分、宮崎地区に
 鎮座する厳島神社に於て、
 春祭りを齋行、海上安全、
 漁業繁栄が祈念された。
 午前九時、沖津宮遥拝所
 に於て、沖津宮春季大祭を
 齋行。沖津宮は大島の北西
 約五十キロ先の玄界灘洋上
 に浮かぶ沖ノ島に鎮座して
 いるお社で、古来より祭祀
 のための参向、参拝が容易
 に出来なかつた為、沖津宮
 遥拝所が設けられた。当日
 は、生憎春霞の為沖ノ島を
 望む事は出来なかつたが、
 遙か沖合いの沖津宮へ敬虔
 な祈りが捧げられた。
 午前九時三十分、御嶽山
 山頂に鎮座する御嶽神社春
 祭りを齋行。
 午前十一時、中津宮に於
 て島内外の氏子崇敬者多数
 参列する中、春季大祭を齋
 行。定刻厳島神社に列立し
 た養父宮司以下神職、遠藤
 友久氏子奉幣使、巫女、奉
 賛会役員外参列者が拝殿へ
 と参進、所定の座に着座し
 祭典を開始した。
 祭典は修成の後、宮司が
 国家・皇室の弥栄と国民の
 平穩、更に海上安全、漁
 業繁栄を祈念して祝詞を奏
 上、続いて遠藤奉幣使が氏
 子を代表して奉幣詞を奏し、
 次いで巫女による浦安舞が
 優雅に奏された。
 その後宮司、奉幣使が玉
 串拝礼、続いて日原奉賛會
 長、河野宗像大社役員役員
 杉田村長を始め各界各層の
 代表が、大神の御加護に感
 謝して次々と玉串を奉奠。
 祭典は滞り無く終了した。
 祭典終了後、照海殿にて
 直会が催され、席上宮司が
 大祭参列のお礼を兼ねて挨拶、
 遠藤教育長の音頭により
 乾杯、和やかな一刻を過
 ぎした。

春季奉納盆栽展

第十三回 宗像大社

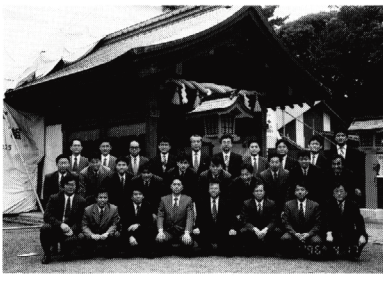
山々が新緑を増し、空に
 は鯉のぼりが舞う五月二日
 から六日まで第十三回宗像
 大社春季奉納盆栽展が、大
 社祈願殿ロビーで開催され
 た。
 古来より宗像郡は神郡と
 称され、郡民はすべて宗像
 大社の氏子、神の民として
 共々栄え、美しい文化の里、
 風光明媚な山河を今日に残
 してまいりました。
 その宗像地区(玄海町、
 宗像市、福岡町、津屋崎町、
 大島村)の愛好家が「宗像
 大社の御徳の発揚に務め
 併せて会員相互の親睦を計
 り、日本の伝統と格調高き
 美を遺憾なく表現できる盆
 栽の普及、創作技術の研鑽
 に励み、盆栽発展の一助と
 する」ことを目的として昭
 和四十七年宗像大社奉納盆
 栽会を結成し、翌四十八年
 十一月第一回奉納盆栽展を
 開催した。昭和五十九年五



月には、春の盆栽展が開催
 された。
 現在、春秋二回開催さ
 れている。
 会場の祈
 願殿ロビー
 一、二階に
 柏、松、真
 松、松類、も
 みじ、かえ
 美を遺憾なく表現できる盆
 栽の普及、創作技術の研鑽
 に励み、盆栽発展の一助と
 する」ことを目的として昭
 和四十七年宗像大社奉納盆
 栽会を結成し、翌四十八年
 十一月第一回奉納盆栽展を
 開催した。昭和五十九年五

出光興産(株) 第五十二期 店主室教育宗像研修

二班 本間 潔
 (出光興産株外外部勤務
 出光興産株中研究所勤務
 養父宮司、太田権吉司の
 ご講話を伺い、神道とは正
 に日本固有の国民性、習慣
 そのものであり、我々の意識
 の有無にかかわらず、心
 の中に生きていくものである
 と深く感じました。「真
 の日本人」と問いかけ
 れば、それは神道の精神を
 理解し実践している日本人
 ではないかと思ひました。
 宗像大社がその伝統をしつ
 かり守り、神職の方々が身
 をもって「真の日本人」を
 目指しておられる真摯なお
 姿に接し大変感動致しまし
 ました。
 私は、自分の人生の中の
 どこかで日本人の大切なも
 のを置き忘れてしまってい
 た様な気持ちで宗像に参り
 ましたが、この四泊五日の
 研修で再び見つけることが
 できました。日本人の
 心ふるさとに
 少しでも近づけ
 た様で、とても
 さわやかな気持
 ちです。これか
 らの生活の中で
 この気持ちをど
 の様にして持ち
 つけていくか
 家族とともにこ
 の思いをどの様
 に分かち合える
 かが、これから
 の大切な課題と考えます。
 私にとって宗像大社での
 研修はとても意義あるもの
 になりました。ありがとうございました。



研修者への説明や水かけの
 為が毎毎毎にあつた
 ているが、例年鑑賞に見え
 る参拝者も多く顔見知り
 となり、盆栽に話が弾むこと
 もしばしばである。
 日頃より丹精を込めた作
 品であり管理の会員も大変
 な気配りである。
 天候に恵まれ五月の連休
 時とあって多くの鑑賞者で
 賑わった五日間の盆栽展も
 六日夕刻、幕を閉じた。

鎮魂は、正座の
 ため当初蒲団
 ておりましたが、
 高望で行った鎮魂
 は、何も聞えな
 く何かスーと引き
 込まれる時間があ
 りました。今後、
 一日に十分間でも
 この様な時間を
 作っていく決意を
 しました。
 大社の皆様、大
 変よい経験をさせ
 ていただきました。
 ありがとうございます。

三班 岡本 卓治
 (出光興産株中研究所勤務
 白衣白袴で身につけて
 の宗像研修は忘れがたい経
 験でした。四泊五日とい
 う本仕方の行い方やその意味
 を知ったことは、日本人と
 して、或いは真の日本人に
 なるために多大な意義あつ
 たと思います。
 私は、はじめ慣れなこ
 とであつて精神も肉体も疲
 れ、夜の鎮魂においても、
 自らを振り返れたのは五分
 程度という有り様でした。
 しかし三日目の高宮での鎮
 魂は、気候もよめ、玉砂利
 の上での正座のため、それ
 程苦痛を感じることなく自
 らをじっくり振り返ること
 ができました。四十五日間
 の研修の最後を宗像で締め
 くくるといふのは、自ら振
 り返り、心を鎮めるのにと
 ても有意義でありました。
 宗像大社の皆様の誠意あ
 ぶれるご指導に深く感謝致
 します。

四班 竹内 邦夫
 (出光石油化学株
 化成品研究所勤務
 当初、研修スケジュール
 が詰まっておき、自分を振
 り返る時間を持つことはで
 きないのではないかと危惧
 しておりましたが、わずか
 な時間でも振り返る時間に
 当てれば、いろいろなこと
 が考えられることを実感し
 ました。
 私は、今まで失敗や反省
 すべきことが多くあり、心
 に引掛かってお
 りましたが、この
 研修で、それらは
 今の自分を形成す
 るための経験であ
 ると思えるよう
 に変化しました。さ
 らに、辛いことが
 気持ち良いことと
 なり、落ちつくこと
 に変化することを
 実際に経験できま
 した。これからは
 すべてのことに対
 して前向きな姿勢
 で進んで行けそうです。
 この研修を受講できたこ
 とに対し心から喜びを感じ
 ております。あわせて、こ
 ういう研修を始めた出光
 光生二店主に感謝の念を感
 じております。
 最後に、宗像大社の神職
 の皆様方に心あたままるご
 指導を賜りましたことを深
 く御礼申し上げます。

二班 木畑 政信
 (出光興産株機油所勤務
 今まで体験したことのない
 神社祭作法を通して感じ
 じたことは、社会の基本的
 な礼儀作法はすべてここに
 凝縮されているという
 ことです。また無駄のない自然
 な動作は、安全な動作の基
 本であり、我々が職場で行
 う作業の安全に活かしてい
 くヒントが多々あると気づ
 きました。

宗務日誌抄
 四月一日 一日
 宗像大社春季大祭
 献し若君採取功勞者表
 形式
 四月二日 宗像護国神社春
 季大祭
 交通安全講話
 四月三日 壬子神社祭
 出光石油化学(株)千葉工
 場副工場長奥田宗博氏
 他五名参拝
 福岡県早良高等学校
 真武野郎氏並同校参事
 兼事務局長西田程敏氏
 新任挨拶の為来社
 四月四日 出光興産(株)福岡
 支店支店長新入社員参拝
 入社教育長参拝
 福岡教育大学庶務課長
 藤田精一氏他一名新任
 挨拶の為来社
 四月五日 宮地嶽神社祭
 福岡財務支局主管西本
 治氏他三名参拝
 (社)福岡県中小企業経営
 者協会主任高田哲氏他
 十七名参拝
 四月六日 旭興産(株)代表取
 締役高橋博氏他十三名
 参拝
 四月七日 (株)新出光新入社
 員参拝入社宣誓後参拝
 四月八日 交通安全キャン
 ペーン於宗像市・神職

四月九日 (株)新出光宗像神
 社奉養父宮司他神職
 二名出向奉仕
 四月十一日 宗像大社氏子
 会々計監査
 鐘崎畑協同組合吉岡
 組組長参拝
 福岡海保保安部灯台課
 長横山和明氏来社
 日里中学校六五〇名
 遠足の為来社
 四月十三日 宗像神宮佐
 分宮子氏他四十二名参
 拝
 九州燃料(株)代表取締役
 社長有馬健一郎氏他閣
 連各社二十五名参拝
 宗像大社菊花三夜会
 四月十四日 宗像大社菊花
 会理事會
 四月十五日 月次祭
 第五十期出光興産(株)
 店主室教育宗像研修開
 始(十九日迄)
 立花俊成福岡教育長
 前降下氏他一名来社
 四月十九日 第七管区海上
 保安本部部長柳田幸三氏
 他五名参拝
 出光石油化学(株)徳山工
 場エナレイン課長永田憲
 治氏他八名参拝
 四月二十三日 出光興産(株)
 門司油槽室強伸神社春
 祭出光石油化学(株)神職名
 出向奉仕
 博多織研究会十五名来
 社
 四月二十四日 国際興業(株)
 代表取締役社長今浪虎
 雄氏他閣連計十七社
 参拝
 四月二十五日 出光石油化
 学(株)徳山工場エナレ
 イン課副課長氏他五名参拝
 文化財建造物保存技術
 協会九州事務所々長近
 藤光雄氏新任挨拶の為
 来社
 四月二十七日 出光興産(株)
 福岡支店長宮下佳廣氏
 他三名来社
 四月二十九日 昭和祭

宗像大社歌会 俳句作品集 三五八

福岡 森 清
亡父と来し磯の香であり春
の海

若松 高橋 忠實
ひらひらと蝶が飛ぶよな桜
が散り

自由ヶ丘 細川 絹子
難壇を三歳の兄つゝかざり

日の里 花田いつ枝
一山を香の花に村興す

福岡中央 山下つづえ
幼な顔木母の芽でよみがえ
る

津屋崎 井浦 良介
泳ぎ来し文引き離さず潮目
より

藤沢 井上 玄洋
花冷えの今朝は声なし浜鳥



(続)

浜の奇物

106

いししいただし

遠賀郡吾屋の田代恒雄氏
から四月三日に吾屋浜で約
三〇センチ程の、死んだ亀
を拾ったが、どのように保
存すればいいかという電話
があった。翌日、吾屋に所
用もあつたので、早速氏を
訪ねて見せてもらった。



下関市汐入海岸のワニ (飯山昭美 撮)

田代氏は吾屋海岸を歩い
て漂着物や流木をあつめら
れている。漂着物の収集に
はそれぞれの好みもある
ようで、氏は主に流木をア
トされ、作品もたくさん見
せてもらった。

漂着したアカウミガメは
甲羅の長さが七センチ、
幅二四センチ、子亀である。
やとこれかという時の
死である。外傷はなかった。
甲羅に一・五センチのワジ
ツボが一個付着していた。

下関市の飯山昭美さんは
時折下関周辺の漂着の情報
を寄せられる。昨年は汐入
り海岸でクニバイルガオ
が発芽していた様子を知

が家に帰り、妻や村人達
を安心させてやろう、と足
を一本ふみ出した時、目の
前小山のような大船の影
が明けやらの海上に現れた
のである。

「あ」作五郎は夢では
ないかと目をこすった。し
かし、船影は依然として朝
霧の中に大きく浮かんでい
るではないか。昨夜の強風
に難破したのであろうか。

「サザン」を乗る波濤に乗
って、その船首は大きく砂浜
に乗り上げ、時々ギイッ
とゆれ動くのであった。声

宗像むかしばなし 幻(まぼろし)の船

今から五百年ほど昔、天
正時代、中頃の話である。
ここに筑前の国、宗像に名主
の親戚に黒石作五郎とい
う者がいた。彼は敬神の念が
厚く夜明け前に美しい江口
浦の浜辺に出て、玄界灘の
白波を望み、はるかに沖ノ
鳥さま宗像三宮の御社を遣
拝するのが常であった。そ
してこの海を眺める度に、
その不思議な船を思い出す
のであった。

それは今から二年前の年
の瀬もせまった或る日のこ
と。数日前より続いた風が

よくやくおさまった翌朝、
作五郎は一人明けやらぬ浜
辺に出て浦人達にもしや不
幸がありはしなかったかと
浦一帯を見廻つたのである。
しかし何事もない浦浜の
様子を見て、「ああよかつ
た、あれだけの雨、風だ、
万二不幸がありはせぬかと
心配したが安心安心、これ
も大神様の恵みであらう。」
今まで数々の難破船を見る
たびに、そのおびたしい
命が失われる事を知ってい
る作五郎は一人胸をなでお
ろしたのであった。早く我

しく知らせてもらった。
写真も何枚ももらった。
宗像海岸にも以前クニバイ
ルガオが観察されている
が、も発芽のことは、あ
まり聞かない。
四月の中頃、その汐入浜
のところで、ワニらしい頭
部が砂に埋もれていたとい
う便りももらった。折り返
しその保存をお願いした。
翌日浜に行つたら頭部は流
れていたが胴部は近くにあ
つたこと、胴部(四肢含む)
にはオオクスが詰められ腹
部に縫い目があることがわ
かり、捨てられた刺製のワ
ニであることがはっきりし
た。また同地でイルカのヌ
ナメリも漂着していること
も記されていた。すぐに現
場へ行きたいところだった
が用事がつまり行けない。
そのためのワニの確保、ス
ナメリは砂浜を掘って埋め
てもらふことをお願いした。
数日して胴部が宅急便で
送られてきた。ビニール袋
に包まれた残存四六セン
チ、まだ湿気があり、ワニ
は赤褐色をしていた。少し

粗いがオオクスがつめ込め
られ、また太さ、二ミリほ
どの針金が胴部と四肢に入
れられていた。本物のワニ
でないが残念だったが、あ
お土産でもらったワニが気
味悪がら海へ捨てられた
たケースであらうか。
スナメリの写真も同封さ
れていたが、まだ死後間も
ないためか灰色をして新し
い。

時間をやりくりして、ゴー
ルデンウィークの前、汐
入海岸へ行ってみた。JR
下関駅からバスで十五分
ほど歩いて海岸まで約五
分ほど歩いて見に行った。
正面に六連島が見え、停泊
した船や、航行する船が多
い。

海岸は狭いが、岩山そし
て砂浜が交互に連なってい
るのは、ミニ二ひらげたパ
ラソルのふら一である。付
近の岩場や砂浜には多くの
流木やプラスチック、ビニ
ール、発泡スチロールが吹
寄せられるようにあり、ま
た流木などで大きなものは
拾い集めて一カ所に寄せら

なく見上げていた作五郎は、
乗組員の生死を案じながら
切れ飛んで、するする船に
登つていった。
船の中はシーンとして
人影一つなく打ち寄せる波
の音が不気味に響きわたる。
それはあかも船人達の助
けを求めた声のようであら
う。作五郎はその声に引か
れるかのように船内に入
った時、「あー」と再び
おどろきの声を上げたので
ある。

種々、白の糸、木綿の類、
布の宝物が積荷され、中
には梱包が解けて下に散乱
しているものもある。作五
郎は、ただ息をのんで見上
げるばかりであった。作五
郎はその足で領主、宗像大

宮司家にこの不思議な漂流
船の事を知らせに走つた。
「当時、この宗像領内の破
船、奇物は宗像家の社物と
なされ、これをもつて郡内
の末社七十五社の修理がな
されていたのである。」
知らせを受けた宗像家は、
すぐさま検視役人をつかわ
し、船内をあらためたが、
船内には人影一つない。役
人も不思議に思ったが漂流
船と認めその日の内に船内
の荷揚げを命じたのである。
太陽が美しい光を西の海に
投げた頃、役人は船体も終
つたので、役人は船体の
処分は明日致そう、と引き
あげを命じたのである。

一夜が明け、数日前の風
もうそのように玄界灘の波
はしずかであった。朝日に
船の面影を語つてくれる。

さざ波はキラキラ輝いて
いた。しかし、その海をなが
める役人も、作五郎を始め
とする村人達もただ茫然と
して立っていた。一夜にし
てあの大船は、この江口の
浦から姿を消してしまつた
のである。ただ一人の乗組
員も居ないあの船が、帆柱
もおもたぬの船が、どこ
にもその姿をかくしたのであ
らうか。

船の積荷で立派に郡内の
末社が復興、修理された事
はいふまでもない。
今、神さびた郡内の末社
をおとすれる時、いつ、誰
が、これを修理したか記録
には定かでない。ただ梢を
わたる松籟が、消え去って
再び戻ることのない「幻の
船」の面影を語つてくれる。

下関港という場所柄か、
韓国、中国、台湾製品が大
量にみられる。恐らくここ
に入港する船から捨てられ
るものがほとんどであろう。
韓国の洗剤などは非常にあ
たらしい。他に中国製のタ
バコ(ゼネラル)、将軍とあ
る。ヤオモチャ類もあつた。
木の実もベカン、ヘーゼル
ナッツやヒメ、シナアラ
ギリ等は拾つてきた。

スナメリは砂浜に盛り上
がるような状態で見られ
ていたので、もう少し深く
掘つてうめた。既にウジが
わき腐敗臭もひどかった。
全長二〇センチ、まだ子
供のイルカである。
汐入浜を歩いて、武久川
に架かる橋を渡って、武久
海水浴場へ行く。ここは
砂利浜であった。浜では漂
着物が集められて焼却され
ている。風は少しあつたが、
浜のそばに草原があつて、
一時間ばかりそこで昼寝も
した。

古物・神宝

(23)

半島露天祭祀に そなへられた品々

金銅製五弦琴 鍍金
を施した金銅製で、頭部
が鳥の尾羽のごとく広がり
の模様を持つ様式である。
たことは、考古学調査に於
いて各地より出土してくる
多くの出土品をみても解る。
弥生時代の木製品や古墳
時代の木製品・埴輪などに
ある実用品やミニチュアを
みると、弦が五本であった
り六本であったりするし、
長さ二七・一センチ、頭
部幅五・八センチ、裾部に
弦孔として五穴を持つ龍角
に作つていた。

一丁度五号祭場が祭祀がお
こなされた頃の七世紀後半
代より、大和朝廷は朝鮮半
島との外交交渉を止め、中
国大陸との外交交渉に入っ
ていく。このことはいまま
で再三述べてきている。
この時期になると沖ノ鳥
祭祀の奉獻品にも変化を来
たしてくる。朝鮮半島の製
品から中国大陸
の製品へと神へ
供える奉獻品が
変化してくるこ
とであり、これ
についても再々
述べている。
もう一つの大
きな変化は雛形
奉獻品に於ける
材料の変更であ
る。

岩上祭祀の場合
は、武器とし
ても用具にお
いても、雛形品は
小形であつて滑
石製品が主力で
あつた。

祭祀が岩陰の祭場へと移
行してくると、雛形品も金
属製品へと変わってくるが、
鉄製品が多用とされている。
これが、半島露天祭
祀(七世紀後半代)以降に
なる。雛形品を作る材料
も木板を銅板とし、鍍金を
行つていく金銅製品へと移
行している。

今回はこの中でも祭祀に
際してのみ使用された倭琴
の雛形品について述べてい
く。

部が一番狭く琴首をなし、
幅四・〇センチである。
ここから琴尾にかけて槽を
作り広がつていく。槽の空
間は〇・八センチある。尾
部は幅六・五センチを計る。
倭琴(やまとこと)は和
琴また東琴とも呼ばれ、神
楽や大歌など大和の国風の
歌謡を奏でる楽器として不
可欠のものである。その独
特の形態は古代から受け継
がれてきている。記紀・風
土記を古典に、天竺真琴・

天沼琴などと記されている
が形態が様式でなく、種々
の模様を持つ様式である。
たことは、考古学調査に於
いて各地より出土してくる
多くの出土品をみても解る。
弥生時代の木製品や古墳
時代の木製品・埴輪などに
ある実用品やミニチュアを
みると、弦が五本であった
り六本であったりするし、
長さ二七・一センチ、頭
部幅五・八センチ、裾部に
弦孔として五穴を持つ龍角
に作つていた。

伊勢神宮の神宝
二十一種の一つに
「鸚尾御琴(とびの
おのおんこと)」と
平安朝の「延喜式」
に記載されている。
琴頭が鳥の尾羽を
しているところか
らこの名が付けら
れたと思われ、
太古、琴を天宮の
前で奏したところ
金色の霊魂が飛
来したとの伝承が
ある。

宮中儀礼や鎮魂また神託に
際して多く用いられてきた
ことがわかる。これらのこ
とより祭祀形態が統一され
た後も、和琴は神が宿る道
具として使われ続けてきた
のであろう。

また随書(倭国伝)に「倭人
楽を奏するに土笛と五弦琴」
とあり、我が国では原始祭
祀そのものに不可欠であつ
たのが、沖ノ鳥五号祭場の
五弦琴原型の姿である。

これから考えて
も、琴が古来から
宮中儀礼や鎮魂また神託に
際して多く用いられてきた
ことがわかる。これらのこ
とより祭祀形態が統一され
た後も、和琴は神が宿る道
具として使われ続けてきた
のであろう。

